

平成30年度
北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業に係る
点検・評価報告書

北海道農政部農村振興局農村設計課

I 点検・評価について

1 点検・評価の対象地区

北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業の地域活動支援事業の実施地区のうち、平成30年度に事業を完了した別海町別海地区、七飯町七飯地区及び岩見沢市北村豊正地区

2 点検・評価の方法

毎年度事業実施地区を訪問し、事業の進捗状況の確認や関係者へのアドバイスをを行っている北海道中山間ふるさと・水と土保全対策委員会委員からの意見や、活動団体、関係市町村及び（総合）振興局を対象としたアンケート調査結果を基に道が評価した。

3 北海道中山間ふるさと・水と土保全対策委員会委員

所 属	職 名	氏 名	備 考
NPO 法人北海道食の自給ネットワーク	事務局長	大熊 久美子	
フードライター		小西 由稀	
北海道大学大学院農学研究院	准教授	小林 国之	
北海道土地改良事業団体連合会	常務理事	本間 勤	
北海道大学大学院農学研究院	講師	山本 忠男	座長

(氏名五十音順)

II 別海町別海地区に係る評価について

1 別海地区の活動内容について

(1) 地域及び活動団体の概要

本地区の別海町は、根室振興局管内の中央部に位置する、明治 12 年、別海村外四カ所に戸長役場が設置され誕生した、面積 1,319.63 km²、人口 15,377 人、世帯数 6,668 戸（平成 30 年 1 月 1 日現在・住民基本台帳）の町である。町名はアイヌ語で「川の折れ曲がっている」を意味する「ペッ・カイエ」に由来する。

北は中標津町及び標津町、南は根室市及び浜中町等に隣接し、東部には日本最大の砂嘴である野付半島、南部には風蓮湖を持つ。地形は全般的に山岳がなく、平坦であり摩周湖から流れを発する西別川のほか、風蓮川、床丹川、春別川、当幌川などの河川が東流し、オホーツク海へ注いでいる。

気候は、広義の太平洋岸式気候に分類されるが、緯度が高いことから東部北海道型として冷涼な気候にある。一方で他の高緯度太平洋式気候の地域に比べ、年間の降雪深度は 345cm と少なく、晴天率が高いのが特徴である。

町の基幹産業は酪農と漁業で、昭和 30 年代のパイロットファーム、昭和 48 年からの新酪農村の建設により、広大な草地資源と摩周湖の伏流水である豊富な水資源を生かし、大規模な酪農が展開され、日本一の生乳生産地となっている。また、次世代の酪農家を育成する別海町酪農研修牧場をはじめ、町独自の乳製品を生産するべつかい乳業興社、日本の乳業メーカー上位 3 社の乳製品工場が立地するなど、酪農・乳牛に関連する機関・工場が集積している。さらに、サケ・マス・ホッカイシマエビ・ホタテガイなど多種多様な水産物の漁獲に恵まれている。このように、日本有数の酪農先進地であり、水産資源に恵まれた、日本の食を支えるまちとなっている。

この地区のふるさと・水と土指導員である酪農家の女性たちが、酪農と漁業に携わる女性を対象として町全体の地域活性化を目指していた。しかし、両者の間には過去の大規模草地開発に起因するわだかまりがあるだけでなく、生活習慣や農協・漁協女性部の考え方についても相当な差があり、一体となった取り組みは断念せざるを得なかった。

このことから、まずは酪農女性を対象として活動を進め、最終的に農業女性も含めた町全体の取り組みとなるよう段階的に進めることとした。

また、酪農に関しては、町が中心となって昭和 59 年から大阪府枚方市と「菊と緑の会」を開催し、道外女性と酪農を営む男性が交流する場を設けていることなどから、町内には道外出身の酪農女性が多い。

しかしながら、農協単位で女性部はあるものの活動が活発ではなく、町全体での酪農女性としての集まりは年 1 回の「酪農女性のつどい」のみに留まっている。

そのため、酪農業や家事に追われる町内の道外出身の酪農女性は、仲間づくりの機会が限られている。

これらのことから、道外からの酪農女性を通じた新たな発想を取り入れ、地域を女性の視点から盛り上げるため、仲間づくりと平行しながら、ハーブを新たな地域資源の題材として活用を目指すこととしている。

(2) 活動の推移

活動事項	年度	活動状況
1 仲間づくり	28	・先進地視察・体験・意見交換（鶴居村（株）丘の上のわくわくカンパニー）（5月）参加者数：28名
	29	・先進地視察・体験・意見交換（北見市（有）香遊生活、クッカーたんの）（6月）参加者数：6名
	30	・親子イベント（石鱈作り）（別海町中央公民館）（3月下旬）参加者数：15組を予定 ・ハーブ・キッチン（調理加工体験）（10月）参加者数：9名
2 ハーブ栽培の取組み	28	・ハーブ・ガーデン（町有地に開設）（5月～11月、8種類） ・ハーブ・キッチン（加工技術研修）（11月）参加者数：10名
	29	・ハーブ・ガーデン（町有地で継続）（5月～11月、10種類） ・ハーブ・キッチン（調理加工体験）（3月）参加者数：8名
	30	・ハーブ・ガーデン（町有地で継続）（5月～11月、7種類）
3 情報発信	28	・農業士会での試供品配布（12月）参加者数：63名
	29	・農業士会での試供品配布（12月）参加者数：51名
	30	・酪農女性のつどいでの試供品配布（10月）参加者数：73名 ・PRパンフレット1,000部作成（3月下旬） ・就農イベント・菊と緑の会への参加（10月）参加者数：18名

注) 下線は、北海道中山間ふるさと水と土保全対策事業より対応

【活動状況写真】

平成 28 年度

先進地視察（5月）



ハーブ・ガーデン（5～11月）



ハーブ・キッチン（11月）



平成 29 年度

先進地視察（6 月）



ハーブ・ガーデン（5～11 月）



ハーブ・キッチン（3 月）



平成30年度

ハーブ・ガーデン (6月)



ハーブ・キッチン (10月)



親子イベント (3月)



PRパンフレット (3月)



(3) 活動への委員会の助言と反映状況

① 委員会からの主な助言内容

- ・ 活動計画には将来を見据えた大きな目標を掲げ、その達成のために各支所でリーダーを育成しメンバーを増やす、この活動のつながりの象徴がハーブであるというような仲間づくりを行ってはいかがか。
- ・ ハーブの商品開発を学ぶのであれば、北見市の「香遊生活」を視察先として検討してみては。
- ・ 最終年度に作成するパンフレットに、取り組みを始めた経緯と年間行事予定、ハーブティーのレシピや効能を載せて参加者の募集をかけてはどうか。

② 委員会の助言の反映及び効果

- ・ 酪農業と仲間づくりのための精力的な活動の両立は難しいため、無理のない形でハーブを利用したネットワークを広げる活動を続けていく。
- ・ H29 に香遊生活を先進地視察として訪れた。気象条件や栽培規模が大きく違ったためハーブ栽培の面では参考になることは少なかったが、ハーブティーブレンドの方法を知れたことは参考になった。
- ・ 最終年度に作成したパンフレットに、別海で育て易いハーブの種類や効能、利用例を掲載し、申込書の欄も設定することとした。

(4) 目標の達成状況

活動計画に明記した目標（数値・定性）の達成状況を以下に示す。

目標（数値・定性）	目標の達成状況
1 酪農女性の仲間づくり 定期的な交流会の開催を通じて、酪農業を営む女性の活動母体づくりを進める	・ 農業士会及び酪農女性のつどいでハーブを使った試供品（ソーセージ、クッキー、ハーブパンなど）を配布した。(H28、H29、H30)
2 ネットワークの拡大 酪農女性を中心とした活動と町内外の他団体との連携を目指す	・ ハーブを栽培する活動をPRするため、パンフレットを1,000部作成し町内に配布した。(H30) ・ 親子イベントとしてせっけんの手作り体験を行った。(H30)
3 ハーブなど新たな地域資源の発掘 冷涼地帯に適しているハーブを中心に新たな地域資源を発掘し、その取り組みを広げる	・ 町有地に「ハーブ・ガーデン」を開設し、別海町の気候での栽培が可能か、数種類のハーブの栽培試験を行った。(H28、H29、H30) ・ 収穫したハーブを加工利用する「ハーブ・キッチン」を年1回開催し新たな地域資源の普及を図った。(H28、H29、H30)

<p>4 別海の魅力発信 チームの活動について、町内外を問わず広く発信していく</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ハーブを栽培する活動をPRするため、パンフレットを1,000部作成し町内に配布した。(H30)
-------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------

2 別海地区の活動の評価について

当該地区の活動を、(1) 活動の状況、(2) 活動への支援体制、(3) ふる水事業の目的(趣旨) 達成の可能性という3つの視点に基づき評価する。

(1) 活動の状況

本地区の主な活動内容は、道外出身の酪農女性が新たな地域資源としてハーブの普及に取り組む、ハーブの栽培・加工を通して積極的な仲間づくりを進めることであった。

ハーブ栽培・加工の取り組みについては、町有地に「ハーブ・ガーデン」を開設し事業期間の3年間で別海町の気候でも育つハーブを試験的に栽培し検討するとともに、収穫したハーブを用いて若い酪農女性に参加募集し調理加工体験を行い加工技術の習得に努めたことは、ハーブを別海町の新たな地域資源として活用していく契機として一定の役割を果たしたといえる。

また、調理加工体験で作成した調理品は、農業士会、酪農女性のつどい及び菊と緑の会で提供し町内の酪農女性に対して、ハーブの栽培・加工を地域資源として広める活動を行い、提供後に回収したアンケートでも「クッキーやパンが美味しかった。作ってみたい。」「ハーブを育ててみたい。」といった意見が見られたことから、これからハーブ栽培に取り組む広がりが出てくるものと思われる。

一方で、他団体との連携については、酪農業という長く家を空けることが難しい事情に起因する消極的な姿勢から取り組みが進まなかったものの、今後も活動のネットワークづくりに取り組むべきであろう。

なお、町有地における「ハーブ・ガーデン」でのハーブ栽培を行った結果、露地での越冬は難しく、活動メンバーの居住地から離れた場所での栽培は継続が難しいことが分かったため今後はより管理の容易な各家庭での鉢植えでの栽培を行うこととしている。

(2) 活動への支援体制

活動団体は、既存の活動母体が無い状態から始めており、別海町が活動団体との連絡調整、ハーブ・キッチン及び親子イベントでの施設予約、試供品配布の段取りなど活動を支援している。

ハーブ・ガーデンでは町有地を無償で使用することができた。

親子イベントでは、参加者の取りまとめに当たって、教育委員会から協力を得ることができた。

(3) ふる水事業の目的（趣旨）の達成の可能性

酪農業を営む女性という視点から、地域活性化の核となる新たな地域資源として、比較的栽培が容易で収穫後の調理加工等の利用も可能なハーブを選び、広く募集をかけてともに調理加工体験を行うことによって参加者同士や活動団体と参加者のつながりを作ることができたことは評価できる。

また、事業で得た技術を生かし、ハーブをあしらった無添加固形石鹸作り講習会を地元の小学生とその母親を対象として開催するなど、地域に根ざした活動の萌芽が見られる。

さらには、最終年度に3年間のハーブ栽培の取組みを通して得られた経験と活動参加への呼びかけをパンフレットにまとめ町内に配布したことは、今後のハーブ栽培が地域に定着することや活動団体へ参加する者を増加させることなど活動を継続させることが期待できる取組みとして評価できる。

一方、最終的な目標の一つであった他女性団体との連携については、酪農女性のつどいや女性農業士会でのハーブを使った調理品の試供やPRパンフレットの配布に活動が留まりあまり進んでいないとの見方もできるが、本業である酪農業と団体の活動を両立することを念頭に、無理のない形で活動と組織を継続していくことを重視すると、現在の状況はやむを得ない結果とも言える。

本事業終了後は、活動メンバーの居住地から離れた場所でのハーブの栽培は継続が難しいことが分かったため、各戸においてハーブの栽培活動を継続し、収穫したハーブを利用した調理加工体験へ参加 会費を徴収して広く募り他団体との連携を探り女性のネットワークづくりを目指していくこととしている。

今後も新たな地域資源としてのハーブを利用した女性ネットワークづくりを継続し、目標であるオール別海の女性の輪づくりにより地域の活性化が図られることを期待するものである。

Ⅲ 七飯町七飯地区に係る評価について

1 七飯地区の活動内容について

(1) 地域及び活動団体の概要

本地区の七飯町は、渡島総合振興局管内の南部に位置する、明治12年に七重村と飯田村が合併した七飯村として誕生した、面積216.75km²、人口28,563人、世帯数13,728戸（平成30年1月1日現在・住民基本台帳）の町である。

北方は宿野辺川を境に森町に、北東は雨鱒川を境に鹿部町に、南東は横津岳の山頂から蒜沢川を境に函館市に、平野部の西側は北斗市にそれぞれ接している。北部の大沼地区には、活火山である秀峰駒ヶ岳と大沼、小沼、葦菜沼を擁する大沼国定公園があり、公園入口には市街地が形成され、それに接続する平坦地は水田、山麓一帯には酪農、畑作地帯が広がる。南部は中央を国道5号線が縦断し、国道沿線は市街地として開発が進んでいるが、西側の平野部は水田、東側の丘陵地帯は畑作、果樹地帯として開発されている。降水量は比較的少なく、温暖な気候に恵まれ、四季の区別がはっきり感じられる良好な自然環境を有している。

産業の面では農業に特徴があり、明治3年にプロシア人が洋種農産物の栽培を行ったことが契機となり、日本における洋式農法を基盤とした近代農業発祥の歴史を持つ。今日では水稻をはじめ馬鈴薯、大根、人参などの畑作、りんごやぶどうなどの果樹、酪農や畜産と全般にわたり、カーネーションをはじめとする花卉栽培も盛んである。

こうした中、七飯町では先進的な取組を進める農家が集い、都市と農村との交流を推進する「アグリネットななえ」が発足するなど酪農、果樹、稲作、畑作、花卉のそれぞれの特徴を活かした地域活動や、豊富な自然資源を背景にグリーンツーリズム活動の気運が高まるなどしている。

七飯の食を考える会は、七飯町に恵まれた多種にわたる食材があることから、一般町民に対して、特に次代を担う子供たちを中心に、食育活動を通じ七飯町の良さを認識してもらうこと、また、食を大切に思う意識の醸成が図られることなどを目的として、七飯町在住の有志が集まり平成27年4月に発足した。

事業を通じて、未来を担う子ども達及び地域住民に、七飯町にある多種にわたる食材やそれらを使用した料理を「ななえ食」として再認識してもらい、産地見学・学習体験等を通して、ふるさとである七飯町に愛着を持つ環境を整え、パンフレットやホームページを通じて七飯町の魅力を町内外に発信することとした。

(2) 活動の推移

活動事項	年度	活動状況
「ななえ食」に関する取組み	28	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民と生産者の交流会・勉強会（3月） 参加者数：14名
	29	<ul style="list-style-type: none"> ・地域活動勉強会（講師：宮下 周平）（1月） 参加者数：50名 ・会員の学習会（講師：宮下 周平）（1月） 参加者数：12名
	30	<ul style="list-style-type: none"> ・親子調理体験学習会（10月）参加者数：40名 （収穫大豆の豆腐加工と親子で七飯食調理体験） ・地域活動勉強会（11月）参加者数：50名
「美味しいななえ探検隊」に関する取組み	28	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども産地見学（久保田牧場）（6月）参加者数：30名 ・美しいななえ探検隊（第1回）（6月）参加者数：40名 （地産チーズ・野菜活用の調理体験（ピザ）） ・子ども産地見学（宮後農園）（9月）参加者数：30名 ・美しいななえ探検隊（第2回）（9月）参加者数：40名 （地産りんごの調理体験デザートアップルクラッブル） ・美しいななえ探検隊（第3回）（10月）参加者数：47名 （フレンチフルコーステーブルマナー講習会とりんごのポスタージュ調理体験） ・「七飯の食を考える会」エプロン作成（3月）
	29	<ul style="list-style-type: none"> ・大豆の農業体験（作付け）（6月）参加者数：9名 ・ななえ食四季のレシピ作り【春】料理講習会（にんじん）（6月）参加者数：14名 ・大豆収穫・枝豆調理体験（8月）参加者数：32名 ・ななえ食四季のレシピ作り【夏】料理講習会 （地産ズッキーニと長ネギ）（9月）参加者数：22名 ・ななえ食四季のレシピ作り【秋】（地産大豆ほか） （地産食材のななえ御膳の調理体験（飛竜頭）と食事マナー学習）（10月）参加者数：40名 ・収穫大豆の味噌造り体験（1月）参加者数：35名

	30	・親子調理体験学習会（10月）参加者数：40名 （収穫大豆の豆腐加工と親子で七飯食調理体験）
活動内容の地域への周知及び理解の促進	29	・「ななえ食」のレシピ及び会の活動紹介パンフ作成（3月）
	30	・会の活動状況紹介及びイベント告知等の情報発信HP作成（1月）

【活動状況写真】

平成 28 年度

美しい七飯探検隊（第 1 回）（6 月）



子供産地見学（宮後農園）（9 月）



地域住民と生産者の交流会・勉強会（3 月）



平成 29 年度

大豆の農業体験（作付け）（6 月）



ななえ食四季のレシピ【夏】料理講習会（9 月）



地域活動勉強会（講師：宮下 周平）（1 月）



平成 30 年度

親子調理体験学習会 (10 月)



地域活動勉強会 (11 月)



HP 成果品 (1 月)



(3) 活動への委員会の助言と反映状況

① 委員会からの主な助言内容

- ・シェフにレシピを作ってもらったので、給食でりんごのスープを提供してはどうか。
- ・エプロンのデザインを、コンテスト形式で子どもたちにアイデアを募るなどしてはどうか。
- ・会をPRするうえで、パネルやパンフレットよりもっと人の目につきやすい媒体が良いのでは。
- ・イベント等を開催する場合、参加者から協賛という形で金銭的な支援を受けることで、活動経費を少しでもまかなえるのではないか。

② 委員会の助言の反映及び効果

- ・ななえ食の考え方を町の給食にも反映してもらい、「ななえ食の日」として七飯の食材を活用した給食をH29年度から月1回程度取り入れてもらっている。
- ・小学児童にななえ食材の絵を描いてもらい、採用した絵は、エプロンや活動紹介パネル、パンフレット等に活用している。
- ・「ななえ食レシピ」パンフレット作成のほか、「ななえ食レシピ」や会の活動が一般住民にさらに広く周知できるよう、随時、活動内容を発信できるようにホームページデザインを委託製作し、継続的に情報発信できる支援内容に改めた。
- ・賛助会員を募り会費を徴収するなど活動経費の確保を図った。

(4) 目標の達成状況

活動計画に明記した目標（数値・定性）の達成状況を以下に示す。

目標（数値・定性）	目標の達成状況
1 「ななえ食」に関する取組み 食材の再発見並びに地域住民と生産者の交流及び勉強会を開催	<ul style="list-style-type: none">・ 地域住民を対象に地域活動勉強会を行い、地域食の重要性について学んだ。(H28、H29、H30)
2 「美味しいななえ探検隊」に関する取組み	<ul style="list-style-type: none">・ 軍川小学校の子ども18名を対象にチーズやりんごの産地見学をした(H28)。・ 軍川小学校の子ども18名を対象に地元食材の魅力を知ってもらうため調理体験を行った。(H28、H29、H30)・ 会の活動をPRするためエプロンを作成した。(H28)

	<ul style="list-style-type: none"> 七飯の食を考える会の会員を対象に「ななえ食」のレシピを作成するための料理講習会を行った。(H29)
3 活動内容の地域への周知及び理解の促進	<ul style="list-style-type: none"> 「ななえ食」のレシピ及び会の活動紹介パンフレットを作成し地域住民に配布した。(H29) 会の活動を紹介するとともにイベント告知等の情報発信をするためホームページを作成した。(H30)

2 七飯地区の活動の評価について

当該地区の活動を、(1) 活動の状況、(2) 活動への支援体制、(3) ふる水事業の目的(趣旨)達成の可能性という3つの視点に基づき評価する。

(1) 活動の状況

本地区の主な活動内容は、西洋農業発祥の地である七飯町で生産されている農作物について、調理や学習を通じて料理や歴史を地域住民に知ってもらうことで地域に対する愛着を持ってもらうとともに、その魅力を町内外に広めることであった。

「ななえ食」に関する取り組みについては、地域住民を対象に3年間実施し、食の大切さと七飯の食の歴史の学習を行うことで、地域の特性・風土の理解と地域への愛着を育む効果があったといえよう。

「美味しいななえ探検隊」に関する取り組みについては、特に軍川小学校の児童を対象に3年間実施し、地元食材を使って自ら調理体験をして食べることで地域の歴史や食材に対する理解を深めることができたといえる。さらに3年目には伝統野菜の「函館人参」の種を植え栽培・収穫を通して調理体験をするなど、事業内容に発展がみられた。

また、活動内容の地域への周知及び理解の促進については、当初学校へ設置する食育パネルを作成する予定だったが、より広く活動を知ってもらうためにホームページの作成を行うことに変更した。

(2) 活動への支援体制

軍川小学校は、児童数18名と会の人数でも全校生徒に対応可能であることや七飯の食を考える会会員の子どもが通っておりPTAという側面からも協力できることから、会の食育活動モデルとして地域活動に授業の一環として関わるなどの支援をした。

また、七飯町は、教育委員会や学校とのスケジュール調整、バス運行の支援などのほか、調理学習や学習会等にも町の施設を無償提供するなどの支援をしている。

(3) ふる水事業の目的（趣旨）の達成の可能性

西洋農業発祥の地という七飯町の地域資源を活かし、地域住民、とりわけ地域の未来を担う子どもたちに、地元の食材を使った「ななえ食」を再認識してもらい、食の大切さと地域への愛着を持つ環境を整える活動は地域活性化の取り組みとして評価できる。

また、本事業でホームページを作成し、活動状況を写真や動画で紹介したり、今までの活動で作成した「ななえ食」のレシピを公開したりするなど情報発信を積極的に行っており、会の活動が町内外に広がっていくことが期待できる。

会の活動で行った講演会に参加して、その取り組みに賛同したことから会に加入し新たにメンバーとして積極的に活動を行うなど、組織として着実に成長しており、本事業終了後も、地元食材を使った料理教室及び会員への会費徴収などにより収入を得るとともに、様々な官民の事業を活用することにより活動を安定的に継続していくことが見込まれ、他の小学校にも活動を広げるなど引き続き目標である「ななえ食」を通じた地域の活性化が図られることを期待するものである。

IV 岩見沢市北村豊正地区に係る評価について

1 北村豊正地区の活動内容について

(1) 地域及び活動団体の概要

本地区の岩見沢市は、空知総合振興局管内の南部にあり、平成 18 年に北村と栗沢町を編入合併した、面積 481.02 km²、人口 82,823 人、世帯数 41,805 戸（平成 30 年 1 月 1 日・住民基本台帳）の市である。

市の西部には、石狩川流域低地である平野が広がり、東部には、夕張山地を形成する低山性の山々が連なっている。また、夕張山地を水源とする幾春別川、幌向川が低地帯に入るところで大小の扇状地をつくりながら、西部を貫流する石狩川と合流している。

気候は、内陸性気候に属し、平均気温は 8 度弱で、最高気温は 30 度を超え、最低気温はマイナス 20 度近くまで下がり、寒暖の差が 50 度にもなる。冬期間の積雪量も市の西部に位置する北村地域は、石狩湾からの季節風の影響で 100 センチを超える。

岩見沢市の北部に位置する旧北村エリアは、農業（稲作）が主要産業となっている。

活動団体である豊正 F A M 協議会は、地域の若い世代を育てて活性化につなげたいと平成 22 年岩見沢市北村豊正地域の生産者有志 34 戸で設立され、生産技術や経営の学習会を実施し生産性の向上に努めるほか、協議会内に直売・加工・交流活動を推進する部署を作るなど多岐にわたる活動を行っていた。

活動を実践するため料理講習会や視察研修などでスキルアップを図っているが、自己負担で行っていることもあり、思うように進んでいなかった。

このことから、人が訪れる地域づくりを通して老後も元気に暮らせる地域とするため、本事業で生産者組織「北の大地マルシェ」を設立し、空き店舗を活用した直売事業と落花生の加工事業を推進するとともに、従前から実施しているフットパスイベントや落花生祭りといった交流事業を一層充実させることにより地域の活性化を図る。

(2) 活動の推移

活動事項	年度	活動状況
1 北の大地マルシェ直売事業	28	・先進地へのバス視察研修（富良野、上富良野、美瑛） （10 月）参加者数：26 名 ・販売促進に係る資材購入（エプロン 15 枚、のぼり 10 本、横幕 2 枚、キッチンワゴン 1 台、ポイントカード 2,000 枚、立て掛け看板）（6 月） ・マルシェ P R ポスター 100 部・チラシ 1,000 部作成（5 月）

	29	<ul style="list-style-type: none"> ・先進地へのバス視察研修（ニセコ、恵庭）（6月）参加者数：17名 ・販売促進に係る資材購入（のぼり5本、横幕2枚、フードインコート5枚、エプロン10枚、ポイントカード3,000枚、買い物カゴ20個、立て掛け看板6個）（6月） ・マルシェPRポスター130部・チラシ5,000部作成（5月）
	30	<ul style="list-style-type: none"> ・先進地へのバス視察研修（江別、当別、月形）（6月）参加者数：16名 ・販売促進に係る資材購入（のぼり10本、フードインコート10枚、エプロン10枚、ポイントカード3,000枚、買い物カゴ20個）（6月） ・マルシェPRポスター130部・チラシ5,000部作成（5月） ・伝統野菜の栽培等（6月）
2 北の大地マルシェ加工事業	28	<ul style="list-style-type: none"> ・販売活動に係る接客研修会（6月）参加者数：20名 ・地元食材を用いた料理講習会（11月）参加人数：21名
	29	<ul style="list-style-type: none"> ・農産物直売所に関する研修会（10月）参加者数：20名
3 交流事業	28	<ul style="list-style-type: none"> ・ピクニック交流会（7月）参加人数：60名 ・ピクニック交流会PRポスター50部・チラシ1,000部作成（5月） ・地域力を発揮した農村づくりフォーラム（2月）参加人数：77名
	29	<ul style="list-style-type: none"> ・ピクニック交流会（7月）参加人数：60名 ・ピクニック交流会PRチラシ500部作成（6月）
	30	<ul style="list-style-type: none"> ・ピクニック交流会（7月）参加人数：60名 ・ピクニック交流会PRチラシ500部作成（6月）

注) 下線は、北海道中山間ふるさと水と土保全対策事業により対応

【活動状況写真】

平成 28 年度

- 農産物直売所「北の大地マルシェ」の運営状況（6～10月）

〈北の大地マルシェの全景〉



〈店内の様子〉



- 販売活動に係る接客研修会（6月）

〈研修会の様子〉



〈あいさつの実技研修〉



- ピクニック交流会（7月）

〈交流会の様子〉



○ 直売・加工・交流に係る先進地研修（10月）

〈美瑛町の直売所の研修風景〉



〈上富良野町のファームレストランの研修風景〉



○ 地元食材を用いた料理講習会（11月）

〈レストランの厨房での研修〉



〈試作料理の試食〉



○ 地域力を発揮した農村づくりフォーラム（2月）

〈集落づくり・交流のお話～北大小林氏〉



〈食農体験のお話～食の自給ネットワーク大熊氏〉



平成 29 年度

○ 直売所に係る先進地研修（6月）

〈高橋牧場（ニセコ町）〉



〈ニセコビュープラザ〉



〈恵庭農畜産物直売所かのな〉



- ピクニック交流会の開催（7月）

〈交流会の様子〉



- 農産物直売所に関する研修会（10月）

〈研修会の様子〉



平成 30 年度

○ 直売所に係る先進地研修（6月）

〈ゆめちからテラス（江別市）〉



〈野菜の駅「ふれあいファームしのつ」（江別市）〉



○ ピクニック交流会の開催（7月）

〈交流会の様子〉



(3) 活動への委員会の助言と反映状況

① 委員会からの主な助言内容

- ・ 成功している直売所をみると、他にはない特徴があることが多い。他の直売所と差別化できる特徴的なことはないか。
- ・ 売る側の理論で品揃えをすると消費者にとって魅力がなくなるので、消費者目線で直売所を経営することを提案する。珍しい野菜など品揃えが豊富だと魅力を感じる。
- ・ 店内のコーディネートや野菜の陳列について専門家を呼んでアドバイスをもらうと良い。
- ・ リーダーの負担が大きいため分担できると良い。

② 委員会の助言の反映及び効果

- ・ カフェを開設して地域の魅力を伝えることとした。
- ・ 新鮮で珍しい野菜も多く、また、こだわりの栽培で美味しく好評価を得ている野菜もあり、値段が安い割に高品質な品揃えであるため、直売所としての魅力が向上した。
- ・ 店内レイアウトやポップなどによるPR・周知などに関する助言を参考にして可能な範囲で生かしている。その結果、購買者に対しては、分かりやすく、購買しやすい店づくりとなっている。
- ・ リーダーを含め8名のコアメンバーを選定した体制整備を行い、連絡調整や直売所運営に対する意欲の醸成に寄与したと考える。

(4) 目標の達成状況

活動計画に明記した目標（数値・定性）の達成状況を以下に示す。

目標（数値・定性）	目標の達成状況
1 北の大地マルシェ直売事業 来場者数及び売上げの対前比 10%増	・ 来場者数は3年間（H28～H30）でほぼ横ばいであったが、売上げはH28と比較するとH30は8%強の増となった。 (来場者数：約9,500人（3年間横ばい）、売上げ：11,753千円（H28）、12,283千円（H29）、12,746千円（H30）)
2 北の大地マルシェ加工事業 加工品の品質の均一化及び開発（1品）	・ 塩ゆで落花生の品質が安定した。 ・ パン、焼き菓子の品質が安定した。 ・ バジルソースの開発に向け試作をした。

<p>3 交流事業 運営方法等の具体的な取組手法の定着及び集落の様々な層の住民の参加</p>	<p>・ピクニック交流会等の交流事業は、「マルシェ」スタッフが役割分担のもとルート選定、食事の準備、開催案内等を行っているが、参加者は行政等の関係者が多い状況である。</p>
----------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------

2 北村豊正地区の活動の評価について

当該地区の活動を、(1) 活動の状況、(2) 活動への支援体制、(3) ふる水事業の目的(趣旨)達成の可能性という3つの視点に基づき評価する。

(1) 活動の状況

本地区の主な活動内容は、高齢化に伴う離農や店舗の撤退などで過疎化が進行しつつある岩見沢市北村豊正地区で、空き店舗を利用した直売所と落花生を加工した商品の開発により、地域から多くの人に訪れてもらうことで地域の活性化を図るものである。

また、地域資源であるフットパスを利用したイベントや落花生まつりなどを一層充実させ、他の過疎地域や都市部との交流を福祉団体などと連携し行うことでも地域の活性化を進めていくものであった。

直売所事業については、事業開始の前年度から開催している旧JAいわみざわ大富支所の空き店舗を活用した「北の大地マルシェ(以下「マルシェ」という。)」において、カフェを開業し地域住民が集う場所として機能させ、都市部へのポスター、チラシによるPR活動により来場者が増加したことでマルシェの安定的な運営が見通せる状況になったが、運営体制には不安要素もあり、引き続き運営体制の強化に向けた話し合いが必要と思われる。

加工事業については、塩ゆで落花生の品質を一定に保てるようになった。また、新たな商品を開発することで収益性の改善を図っている。

なお、マルシェの加工事業の拠点となる加工所は使用頻度が少なく、マルシェ全体の収益を悪化させており、加工事業の充実及び利用者の増の両面からより一層の改善を図っていくことが必要。

交流事業については、フットパスを利用したイベントにおいて昼食会場として直売所を利用するなど、地域住民と都市住民との交流の場としての役割を定着させることができた。

(2) 活動への支援体制

岩見沢市(農政等)は、フットパス交流会等のイベントに参加するなど、マルシェの活動を側面支援している。

地元農協は、マルシェの店舗の使用料や光熱費等において、マルシェの負担を軽減するなど、一定の配慮をしている。

また、空知農業改良普及センターは、本豊正地区を取組の重点地域に位置づけており、落花生やバジルの栽培指導を含め、マルシェの円滑で効果的な活動が持続化するように、経営への助言や関係者との調整等様々な支援を行っている。

(3) ふる水事業の目的（趣旨）の達成の可能性

空き店舗を利用した直売所にカフェを開設するなど新たなコミュニティ空間として創造し、過疎化・高齢化の進行により失われつつあるコミュニティ機能を補完し、回復していく取組みとして地域活性化に寄与しているという評価ができる。

一方で、事業期間の3年間でマルシェでの直売所の売上げは堅調に伸びているものの、営業利益の大幅な増加には加工施設の利用頻度が十分とは言い難い。そのため設備投資回収までには至っておらず、経常利益は赤字となっているなどマルシェ全体での事業の継続性という点では課題が残っている。

最終年では、加工施設の経営と直売所の経営を分離し、マルシェ商品の加工を行うときに利用料を払う形としてマルシェの地域拠点としての機能を維持する試みを行い、現在のところマルシェの役員報酬は十分に支払えていないものの、スタッフの人員費を含め必要な経費を確保できる経営状況になったことから、今後は当初の目標である、継続して地域のコミュニティ機能を支えていく役割を果たせるよう、運営の安定化に向けた体制強化が図られることを期待するものである。